

---

**777**

宿り木ノタネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

777

### 【Nコード】

N4890B

### 【作者名】

宿り木ノタネ

### 【あらすじ】

ホラーアクション。なにげにいろんな映画などパクッてるかも。

## プロローグ（前書き）

けっこうグロく書きます。

その様な描写が苦手な人は読まない方がいいかも。

ま、ただのホラーでは終わらせませんよ。

## プロローグ

「露人（ロシア人）墓地、異常ありません」

粉雪は舞い散り、墓石は冷え、軍人の声が響く。

人数は6人。その警戒した表情からこの周辺で戦闘任務が発令されているらしい。

しかし彼らの迷彩服が汚れ一つ見当たらない事から、まだ事は起きてない様だ。

「どうする。奴どころかLv1（レベルワン）すら確認でき無いぞ。」

「妙だ……。この静けさは……。あまりに……。」

「移動すべきだ。これは多分、罠だ。」

「馬鹿な。奴らにそんな知能的な事ができるはずが無い。」

「白石。その解釈は危険だ。奴らに俺達の考察など無意味だ」

一時の間を置いて、そのチームのリーダーらしき人物が声を発する。

「ここで待機だ。みな装具と武器をチェックしろ」

彼らが持つ武器に64式小銃があることから彼らが日本陸上自衛官である事がわかる。

「こちらB班<sup>ブルース</sup>。Lv4、確認出来ず。待機命令を許可されたい。」

「……………」

「こちらB班。応答願いたい。」

「……………」

「こちらB班!どうした指揮官!」

「……………」

「リーダー!!あれを!!」

チームの一人が声を上げる。

その声で皆が一斉に彼の指す方を向く。

……人がいた。

いや、正確に言えば人だった者がこちらに向かっていた。人であらざる者に頭を喰いちぎられ、引きずられながら。

「うわあああ!!」

「Lv2だ!!全員!戦闘準備!」

「あれは……A班の奴だ!くそ!!襲撃されたか!!」

「な……、お前ら後ろを見る!!」

「ま……まさか!!」

「奴らも……A班の奴らだ……。Lv1になっちまってやがる……。」

そこにはクモが足を広げたような頭をし、下半身がこれもまたクモの様に八本足をし、人間が皮を剥がれ、筋肉が剥き出しの状態の上半身の生き物がいた。

その後ろには同じ様に筋肉剥き出しの、しかし頭の部分には頭がなく、代わりに鉄骨が十字架の様に

「そこ」

に刺さっていた。

彼らは彼らの方に向かっていった。

銃声になる。

だがそれでも彼らは向かう。

痛みなどその姿から無いのは明らかだ。それ異常の痛みを抱えているのだから。

銃声の代わりに悲鳴が聞こえる。

だがそれも何かおぞましい音に変わる。

ここは、呪われた場所。

かつて人がいた場所。

けどもう人はいない。

その代わりに彼らが出来た。

だからここは彼らの場所。

彼らの住む呪われた場所。

## プロローグ（後書き）

なんか緊張感出したいなあ。  
てかこれ書ききれっかな。

俺頑張る。

## プロローグ 2 (前書き)

プロローグ二つ目。

## プロローグ 2

目を開ける。真っ暗な天井しかない。

自分が事務所で眠っていたことに気付く。

時間は19時。今日も

「仕事」

の依頼も

「ブツ」

の依頼も一度も来ない。

二週間この状態が続いている。流石に事務所でポケットとしているのも飽きた。

営業周りでもしてみるかと思ったが、慣れない事はしない方がいいと諦めた。

第一、スーツなど持ち合わせていないしこの商売を簡単に広めるのも危険だ。

煙草に火をつける。

やはりあちらさんで話を回して貰った方が確実だろう。

あちらさんとはつまり

「ヤクザ」

とか

「組の人」

達の事で、

「仕事」

と

「ブツ」

の依頼はまあ、

「殺し」

と

「銃機の取引」

のことだ。

要するにここは武器の密売事務所ってことだ。

それにしても二週間も何も無いのは珍しい。

この商売を3年もやってているがこんな事は初めてだ。

ブツの方だけでは依頼が少なかったため、殺しの依頼も受ける様にしたんだが・・・。

もう一つ何か考えてみるか。

だがこの仕事をする前の職が特殊なものだった為に自分一人で出来そうな事が簡単にはうかばない。

それにそって今の商売を始める事になったんだが。

「どうすっかな。」

たまらず一人ごとが漏れた。

このままでは経営が難しくなる。

海外に行ってしまうおうか。この国じゃ簡単にはいかないことだらけだ。

プルルルル。プルルルル。

電話が入った。

久々に音を発した機会に少々面食らってしまった。

やっと依頼が来たことにホツとしながらも。

出来ればブツの方にしてもらいたい。

ずっとボンヤリしてたため、殺しの方は腕や感覚が鈍っているはずだ。

「はい。こちら黒丸事務所」

「・・・・・・・・・・。」

なぜか相手の返事がない。

「こちら黒丸事務所。用件をどうぞ」

いたずらかと少し肩透かし感を感じたがもう一度呼び掛ける。

「・・・神楽、だな」

「っ!」

声が聞こえた。

相手は俺の捨てた名前を口にした。

そしてこの声にも聞き覚えがあった。

「いえ・・・黒丸です」

はぐらかすのは無駄だと思ったが今の名前を口にする。自分がかなり動揺しているのがわかる。

「・・・もう全てわかっている、神楽。名前を変えたことも。お前が今までどのように生きていたかも」

・・・。

なぜ、という気分しかない。

なぜ調べた。いや、それよりもなぜ今頃になって。

「・・・南里二尉。」

彼女の名を口にした。それは3年ぶりの事だった。

「3年ぶり……か。どちらにとっても、いまさらだな」

自分の心をみすかされた様に感じた。

だが多分違う。彼女も同じ様な心情なのだろう。

彼女はこんな風に客観的な物言いをするのだ。

「お前が隊を抜けたことはわかっていた。だが、事情から連絡を慎重事にした。

「……用件は何か」

俺も少し落ち着いてきたのか、彼女に答えを求めた。心情を言葉として相手に伝える気にはならなかった。

やはり3年の期間がそうさせたのか、あの頃の俺とはだいぶ変わったのだろう。

「……そうだな。」

くわえていた煙草は、根本まで灰になって落ちていた。

## プロローグ 2 (後書き)

主人公は二人にして二人称視点でいってみようかな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4890b/>

---

777

2010年10月25日19時45分発行